

---

# Over Line ~ 君と出会うために

さつきひろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Over Line ～君と出会ったために

### 【Nコード】

N9438Y

### 【作者名】

さつきひろ

### 【あらすじ】

ある日の昼休み、彩と同じテーブルに乱入してきた一人の男。

彼は終始マイペースで勝手な振る舞いをし、彩は腹立ちを抑えきれない。なのに、そのペースに巻き込まれていく。

入り口の方から人が入ってくるたびに、ドアに取り付けられた鈴が重苦しい音を立てる。この店と同様に年季の入ったそれは、お世辞にも軽やかな音とは言えない。それでも、人が来たことを知らせる役には立っているのだから、無用の長物というわけでもないのだろう。

鈴くらい、さっさと取り替えたらいのに、と思わなくもないが、慣れてしまうと、これはこれで味がある気がしてくるから不思議だ。きっと、ここに通う常連は、似たようなことを考えているに違いない。誰かが文句を言っているところは見たことがないし、そもそも、鈴を替えたところで、ここの客層や入りが変わるとも思えない。

つまり、何も変わらないから放置されているのだろう。

ここは、まるで時が止まったかのようにレトロな空間だ。

いつ来ても時が止まっているように思える、寡黙なマスターが一人でやっている、街の小さな喫茶店。駅からはさほど遠くはないが、大通りからは一本入った閑静な場所にあり、通りすがりにふらっと立ち寄ることができるような魅力的な立地ではない。

年季の入った扉を開ければ、カウンターと、十席にも満たないテーブル席。昔ながらの、とでも付け加えたくなるような外装とその立地も手伝って、客の数は限られている。それでも、それなりに常連客はいる。

彩あやだって、それが気に入って通っている一人だった。

限られた人数しか入らない店は静かで落ち着くし、マスターの淹れるコーヒーの香りが漂う店内はひどく居心地がいい。考えごとがある時や一人になりたい時にはもってこいだし、コーヒーを飲みながらぼんやりとしているのも至福の時だった。

彩は、この近くにある小さな会社の事務員だ。小さい事務所の性  
とでも言うべきか、交代でお昼を取るために一人で昼休みを過ごす

ことも多い彩は、あまり混み合わないこの店が気に入っていた。昼時でもさほど混雑することもないここは、読書や考えごとの邪魔をされることも少ない。店の経営としてそれはどうなのかと思わなくもないが、彩にとっては理想的な環境だ。

毎日のように通っていていれば、おのずと座る席も決まってくる。今日も今日とて昼食を兼ねて店に赴けば、カウンターのいつもの席は残念ながら先客によって占領されていた。仕方なく、一番奥にあるテーブル席を選ぶ。席数の少ないこの店で、一人客である自分がテーブル席に座ってしまったのは、迷惑になりかねないが仕方がない。いつもだったら、カウンターを利用していた。

後から考えれば、この席に座ったこと自体が、全ての発端だった。けれど、その時、その席に座らなければ、何事も起きなかったのだと思えば、まさしくそれが発端だったと言えるのだろう。

「おなかすいたな……」  
はあ、と、溜め息をひとつ。

いつもならもう少し早い時間にお昼に入れるのに、今日はいろいろと立て込んでいて誰もお昼を食べに行く余裕がなかった。ようやく時間が取れた頃には昼休みというにはだいぶ遅くなってしまっていた。

だから、ここでゆっくりしていく時間もあまりない。それでも、食後のコーヒーを飲んでいる時間くらいはあるはず。

それは、いつもの日課で、変わらない毎日だった。職場と自宅とを往復するだけの、変わり映えのしない日常。それはつまらないかもしれないけれど、平凡で堅実な生き方だった。波乱万丈な人生を送りたいとは思わなかったし、ドラマに出てくるような恋も、映画のようなスリリングなできごと、今の生活には無縁のことではなかった。

彩はコーヒーを一口飲んで、持って来た読みかけの文庫本を出そうとして頬を引きつらせた。

お気に入りの革製の洪めのブックカバーを掛けていたそれが、何

やら珍妙なイラストのついた紙製のものに変えられている。

「な、何これ……」

全く、身に覚えがない。

いや、こんなくだらない悪戯をする相手の心当たりはある。だが、あまり考えたくない。

(大輔……あのバカ!！)

思い浮かべた幼馴染の顔に向かって、彩は思い切り罵倒を浴びせた。

大輔は彩の実家の隣に住んでいた幼馴染で、今はCG関係の仕事に就いている……らしい。らしい、というのは、あまり興味を持って彼の仕事の話を聞いたことがないからだ。彼の仕事の話を聞こうとすると、どうしてもその延長線にある趣味の話にすっ飛んで行って收拾がつかなくなるので、面倒だからだった。

お互いに実家から出て来て数年、たまに会って近況報告をしあうくらいの付き合いは続いている。とは言え、大輔とは色めいた方向に発展することはまるでない。何故なら、彼は相当のアニメオタクであり、あまりそういったことに興味はないらしいからだ。

昨日だって久しぶりに食事に誘われたものの、終始そんな話ばかりされていたような気がしないでもない。

別に、彼の趣味を馬鹿にしたいとは思わないし、それはそれで勝手にやってくれたらいいとは思うのだが、たまにこういう悪戯をするから頭痛がするのだ。

たぶん、これは、今、彼が関わっているという何とかというアニメのキャラクターだろう。何だかいろいろと細かく説明をされたのだが、右から左に聞き流して終わってしまった。きつと、彩が聞いていなかったのに気づいてこんなことをしたに違いない。

こついうどうでもいい悪戯を、本気でやるのが大輔なのだ。

再び溜め息をつけてそのブックカバーを外そうとすると、挟んであった栞まで同じキャラクターの仕様に換えられている。どこまでも用意周到だ。頭痛がしてくる。

すると、何とも言えないタイミングで携帯がメールの着信を知らせる。相手を確認すると、案の定と言うべきか、この悪戯の張本人だった。

彩が驚いたのを想像しているのが楽しいのだろう。メールの文面は短かったが、やけに楽しそうだ。腹が立つということでもない他愛無い悪戯ではあるが、さすがにこれを会社の人たちに見られてしまふようなことがあるのは気恥ずかしい。彼の仕事をバカにしたくはないけれど、そういう目で見てしまふ人たちがいるのも本当だから、面倒ごとはなるべく避けたかった。

彩はそのブックカバーを外して、丁寧に折り畳んでバッグにしまい込む。それから改めて文庫本を開き、読みかけのページに視線を落とした。

そうして、彩が本の世界に引き込まれようとしていた、その時。

店の扉が、勢いよく開いた。

店そのものの佇まい同様に年季の入った扉は、もちろん、自動で開くようなものではない。時折、雨が降った日などは湿気で立て付けが悪くなり、客を拒否しているのではないかと思うくらいに重くなる代物だ。そして、扉同様に年季の入った鈴が、鳴っていると言ふよりも勢いに振り回されて耳障りな音を立てた。

その騒々しさにせっかくの時間を台無しにされたようで、彩は眉をひそめて視線を上げた。どうやら、入ってきたのは若い男らしい。ちらりと窺うが、見知った顔ではない。

どうでもいいか、とばかりに、彩は視線を本へと戻した。その瞬間に、騒がしい珍客への興味は失せた。知らない相手がどうだろうと、彩には関係のないことだ。

うるさい客がこの静かな空間の空気を乱して行くのは不愉快だが、ここは彩の店ではない。彩には客を拒む権利はないし、ほんの一時だけ我慢して、関わらなければいいだけの話だ。

と、彩が我関せずを決め込んでいると。

どかどか、と足音も高らかに歩いてくる音がして、誰かが彩の向

かいの空いた席に腰を下ろした。

「……はあ!？」

相席を頼まれた覚えはない。もし、そうだったとしたら、休憩の残り時間もあまりないことだし、彩は席を立って会計を済ませてここを出てもかまわない。こちらは既に食事を済ませてしまっているのだから、何も問題はない。

「何なの、あなた」

思わずそう言っつてその相手を見やれば、相手は慌てた様子で周囲をきよるきよると見回す。

「ごめん、ちよつとの間だけ、ここにいさせて!」

ね? と、両手で拜むように懇願の姿勢を取られて、彩は思わず黙り込んだ。

向かいに座つたのは、若い男だった。おそらく、彩と同じ年か、それよりも少し上くらいだろう。先ほどの騒がしい珍客は、この男に違いない。

派手過ぎない程度に明るく染めた色の髪を長く伸ばして、後ろ髪を緩く後ろで三つ編みにしいて、何とも目を惹くタイプだ。どこが、ということを引きちゃんと説明はできないが、それをオーラというのならそう呼ぶのかもしれない。言い換えるのならば、存在感がある、とでも言うべきだろう。彩はぼかんとして、目の前に座る男を見つめた。

たぶん、この男は、彩が最も苦手で嫌いなタイプの人間だ。どう鼻屑目に見ても、相容れないタイプであることを本能的に感じて、警戒心だけが頭をもたげる。

本音を言えば、これ以上は関わりたくはない。だが、彼はどいてくれるつもりはまるでないらしい。

彩の目の前にどつかりと腰を下ろして何をするのかと思えば、彼はポケットの中からくしゃくしゃにまるめてあつた帽子を取り出して素早くかぶつた。そして、そのままテーブルの上で組んだ腕に突っ伏すような形で顔を伏せ、啞然としている彩に向かってにこりと

笑って、小さく人差し指を立てて「静かにね」と言って笑った。

「俺、ちよつとだけ寝るから。だからさ、少しの間でいいから、何も言わないでいてくれる？」

何かを言うも何も、彩には何が何だかさっぱりわからない。どう考えても口の挟みようがないではないか、と思っっている彩をよそに、彼は本当に顔を伏せて寝の体勢に入ってしまった。

いきなり人のテーブルに相席を決め込んで、そのうえ、寝るとは何事だ。

腹は立つが、何も言わないでと言われてしまった手前、彩は馬鹿正直に口をつぐむしかない。

相手は見も知らぬ他人なのだから、そんなお願いなど聞いてやる義理も道理もないのだが、妙に律儀な彩の性格では無視することができないのだ。

彩がむつつりと黙りこくつたまま成り行きを見守っていると、またしても年季の入った扉が開かれた。驚いてそちらに目をやれば、半開きの扉から中を覗き込んでいたのは、数人の少女たちだった。

彼女たちは息を弾ませ、きらきらとした視線で店内をぐるりと見回した。

「……いないみたい」

「でも、絶対、見たよ！ この通りを歩いていたのは、絶対、なんだから！ あたしが見間違えるわけないもん。この辺りのどこかの店に入ったのは確か！」

「……この店じゃないんじゃない？ 何て言うか、らしくないし」「うーん、そうかも……。タカくんが選ぶには、地味過ぎって言うか、古過ぎって言うか？」

ここを気に入って通う常連や店主もいる前で、神をも恐れぬ暴言を吐く少女たちは、ひとしきり店内を見回してから顔を見合わせた。「ねえ、やつぱり、この通りを抜けた先にあるシヨップじゃない？

前にさ、どつかの雑誌であそこの服が好きだとか言ってたような気がするし！」



「きつとそうだね！」

彼女たちは騒ぐだけ騒いで、それを謝罪することもなく、慌ただしく店を出て行った。

後に取り残されたのは、その展開について行けずにぼかんとしている客ばかり。彩もその中の一人であることに間違いはなく、騒がしくも厚かましい少女たちに何とも言い難い溜め息をついた。

そのまま日常に戻るには、些か難のある微妙なごちなさを含む空気が漂う。

「……助かったあ」

そんな微妙な空気を完全に無視して、目の前の男が突つ伏していた顔を上げた。向かいにいる彩にも、周囲の状況にも、全く動じていないと言うか、まるっきり意識の外、とても言うべきか。

「ねえ、あの」

彼が何から助かったのかなんて、追及するつもりはない。むしろ、どうでもいい。彩は、一人の時間を邪魔されてすこぶる機嫌が悪かった。

刺々しく声をかけると、彼はきよとんとして彩を見た。

何故、彩が怒っているのか、彼は欠片も理解していなさそうに見える。

「はい？」

「はい、じゃないでしょう！ 用事がないのなら、他の席に行つて欲しいんだけど。見たところ、相席しなければならぬほど混雑しているわけではないみたいだけど？」

「ここは、さほど席数があるわけでもない。だが、昼時を既に過ぎってしまった時間の今、別にわざわざ相席するほど混み合っていない。」

用事がないのなら、とつと他の場所へ移つて欲しい。

「何だか、つれないお言葉ですねえ」

「言わせてもらうけど、私にとってあなたは見ず知らずの赤の他人です。そんな人に一人の時間を邪魔される覚えはないし、不愉快で

す。そう言えばわかりますか？」

「……見ず知らず。って、俺のこと、知らないの!？」

「どうして、私があなただのことを知っていなくてはならないの？」

あなたはこの店の常連でもないし、同じ会社の人でもないし、私の個人的知り合いなんかであるはずもない。悪いけど、あなたのように頭に豆腐が詰まったような友人はいないから」

「……豆腐？」

彼はきよとんとして彩を見て、それから、わずかに傷ついたような表情を浮かべた。

一瞬、言い過ぎてしまったかと反省するが、腹立たしい気持ちの方が勝つてしまい、素直に謝罪の言葉は出て来ない。

「ふうん……そっかあ。ねえ、ひとつ、聞いてもいい？」

さすがに怒るかと思っただが、彼は見当違いのことを言い出した。

「え？」

「あのさ、確認するけど、本当に俺のこと知らないの？」

疑うように彩を見やり、言葉を重ねる彼に、彩は更なる苛立たしさを覚えた。

ほんの一瞬前、謝った方がいいかな、なんて思ったことも、吹っ飛んでしまった。

疑われても困る。本当に、知らないのだ。もし、この相手に自分のことを一方的に知られているのだとしたら、気分が悪い。そもそも、そんなこと、念を押されるようなことでもない。

「知らないわよ。用事がないのなら、他へ行ってくれる？ 私は、

本を読みたいの。それを、あなたが邪魔しているのよ」

もう、時間がない。気になる先まで読み進めるつもりだったのに、一行も進めなかったことを思うと更に腹が立ってきた。

「……あのね、俺ね、東城貴樹とうじょうたかきっていうんだけど」

聞いてもいないのにいきなり自己紹介を始めた目の前の男に、彩は怒りを通り越して頭を抱えなくなった。

きつと、この男は馬鹿だ。アホだ。関わらない方がいい相手に、

関わってしまった気がする。

「何度も言うけど、私はあなたのことなんか知らないから」

彩が溜め息混じりにそう返すと、彼はにこにここと笑った。それも、やたらと嬉しそうに。

「うん、だから、自己紹介！ 何か、新鮮で嬉しくて！」

「は？」

「ねえ、俺と友だちになつてよ！」

「……はあ？」

貴樹、と名乗った彼の唐突な申し出に、彩は面食らって聞き返した。

何だか、嫌な予感が、する。

「いや、ほら、こうやって出会ったのも、何かの縁ってことで！」

あ、ねえ、携帯貸して！」

いいとも悪いとも言っていないうちに、テーブルの上に放り出していた携帯を取り上げられ、勝手にいじくられ、メールアドレスの交換、とやらをさせられた。図々しいにも程がある。帰ったら速攻削除だ。

「はい、俺のアドレスも登録したから！ 彩っていい名前だね！」

上機嫌で携帯を返されるが、対する彩の機嫌は降下一直線だ。人が反応できないでいるうちに勝手に個人情報を見られたこの状況でにこにこしていられる人間がいたら、ぜひともお目にかかってみたいものだ。

「ねえ、あなた、どういうつもりなの」

「どういうって……だから、お友だちに」

そう言った貴樹の眼差しが、テーブルの上に放り出してあった栞の方に吸い寄せられる。

「スイートキューティ！」

「は？」

「ねえ、スイートキューティ好きなの！？ 俺も大好き！ いっぱいレア物持つてるよ！」

「ごそごそとポケットを探ると、貴樹は似たようなゴミ（彩にとつてはまさにゴミだ）を、ざらりとテーブルの上に広げた。それは、いわゆるフィギュアと呼ばれる類のものだろう。小さめのデフォルメされたタイプのもので、あれこれ種類があるらしいことを大輔が誇らしげに言っていたことを思い出す。

そうしてから初めて、貴樹が口にしたスイート云々が、まさに大輔が言っていたキャラクターの出てくるアニメのタイトルであったことを思い出した。

「お近づきの記念に、これ、あげる！」  
要らない、と言いつ返す気力も失せた。

最初に、豆腐が詰まっている、なんてひどいことを言ってしまったような気がしたが、それは、豆腐に対して失礼な気がしてきた。それ以上に、何と言うか、本気で関わらない方がいいように、思える。

おそらく、黙っていれば女性からはもてはやされる顔立ちなのだろう。こういう派手なタイプは彩が苦手とする相手だから、私生活で接点があることはまずありえない。本能的に拒否してしまうからだ。

頼むからあまり喋らないで欲しい。大輔の話を聞いているよりもひどい頭痛がしてくる、と、思ったものの、それを口に出せば猛然と反撃して来そうだから、やめておいた。

このまま無視してしまうかどうかどうするか、悩んだところで勝手に登録されてしまった事実は消せない。さすがに目の前で消すということをするのは気が咎めるから、持って帰って、知らない所で存在を消去するしかあるまい。

「じゃあ、後でメールするね！」

と、自分勝手な言葉を言い残して、彼は実にさりげなくスマートフォンに彩の分の伝票を持って行き、それを支払って出て行った。

そのあまりの自然な行動に口を挟むこともできずに見送ってから、彩は我に返る。

ひよつとして、それほど嫌な奴でもないのだろうか。いやいや、あれは警戒するべき人種だ、とぐるぐる考えながら、彩は最後の「ヒ」を飲み干したのだった。

そいつからメールが来たのは、その夜のことだった。

彩はシャワーを浴びて出てきたところで、メールの着信を告げるように点滅する携帯に気づき、携帯を開いた。たまに来るメルマガかと思いきや、メールの送信者の欄には、昼間の豆腐野郎の名前がある。

あの男は、ちゃっかりと自分の名前も登録しておいたらしい。

そのまま削除してしまおうかとも思ったが、さすがにそれは悪いような気がしてやめた。いくら何でも、読みもしないで削除はひどい……かも、しれない。存在ごと消去しようと思ったのは事実だが、成り行きで奢ってもらってしまったのも事実で、何となく気が咎めてそのままだった。

とは言え、昼間のあの様子からすると、いきなり馴れ馴れしい文面がある可能性もある。彩には理解できない顔文字だとかが乱舞していそうな、そんなイメーজだ。

だが、恐る恐る開いたメールには、昼間の印象とはまるで違った丁寧な文章が並んでいた。

それは、昼間の自分の行動の非礼を謝罪する文章から始まっている。そして、そのお詫びとお礼とを兼ねて食事をご馳走したいので都合のいい日程をいくつか教えて欲しい。その中でこちらが合わせられる日程をお知らせします、と結ばれていた。

昼間の印象からはまるで別人のような、丁寧で落ち着いた言葉で書かれたそのメールに、彩は考え込んでしまった。

あの外見や行動と、このメールの礼儀正しさとが、どうやっても結びつかない。

あれで、意外と生真面目だったりするのだろうか、とは考えたものの、彩は返信メールを書くことはなかった。何を書いていいのかもわからなかったし、いきなり食事に誘われても、どう反応してい

いか困ったからだ。それに、スイート何とかの話を食事中に延々とされても嫌だ。そんな話題で盛り上がるのは、大輔だけで充分である。彩には、それ以上その話題を受け入れるキャパシティはないのだ。

放っておこう、と決めて、彩はそのまますっかり忘れてしまっていた。

彼から二通目のメールが来たのは、それから、十日ほど後のことだった。

そのころには彩は彼のことなどすっかり忘れていて、誰だこいつ、の一言で切り捨ててあっさり削除するところだった。

寸前で気づいてメールを開くと、前回と同じようにあの時の様子からは想像もつかないような几帳面な文面が、そこに綴られていた。その内容は、返事がないことから、彩が怒っているのではないかと心配しているものだった。おろおろしているのが画面越しに伝わってくるようなそれに、彩は思わず笑いそうになる。

最後に、同じように食事を誘う言葉があり、このメールに返事がない時は、今度こそアドレスも名前も全て削除するので心配しないで下さい、と付け加えられていた。どうやら、本気で彩が怒っているのだと解釈しているらしい。

「……気にしているらしいのは、意外かな」

そんなことを気にするようなタイプには、見えなかった。何しろ、初対面がアレで、第一印象としては最悪の部類に入る。見た目の派手さも手伝って変な先入観を持っていたが、もしかすると、思っていたよりもずっと真面目に物事を捉えている人間なのかもしれない。だとすれば、豆腐などと称してしまっただけが悪かったかもしれない、と彩は少しばかり反省した。

とは言え、そもそも、そんな印象を与えるような真似をしたのは向こうなのだから、それはそれで仕方のないことだ。

だが、第一印象をいつまでも引きずっていても、こんな生真面目にメールをしてくる相手には失礼だ、と考え直す。失礼な相手に払

う礼儀はないが、礼儀正しく接してくる相手には相応の返事を返すのが礼儀だ。

そうになると、最初のメールを無視してしまう形になってしまったのが、少しばかり気が咎める。

彩は少し考えてから、東城貴樹宛てに簡単にメールを書いて送信した。

返事が遅れたことへの謝罪と、食事を誘ってくれたことへのお礼。都合がつく日をいくつか選び出して書き添えただけの、事務的なメールだ。さすがに、最初に来たメールの存在すら忘れていましたと正直に書くことはできず、返信が遅れたのは私生活が忙しかったせいだ、ということにしておいた。その方が角も立たない。

意外と、あれでもただの馬鹿ではないのかもしれない。

送信を終えた携帯を閉じると、彩は明日に備えてさっさとベッドに入ったのだった。

その、頃。

都内某所にある放送局の控え室で、貴樹は携帯を睨んで考え込んでいた。

ついさつき、ずっと待っていたメールが来たものの、開いて読む勇気がないのだ。

「……………何やってるの、貴樹」

「いや、別に……………」

「さつきから携帯睨みつけているけど、睨んでいるばかりじゃメールは来ないわよ。それに、もうすぐ本番なんだから、気持ちはずちやんと切り替えてね」

「……………はあい」

本番を前にして嫌なメールを見て凹んでしまうのはどうかと思っ



だが、二時間もある生放送の間、メールの内容が気になってそわそわしているというのは、もっとなんと性質が悪い。気合を入れてメールを開いて見ると、それはたいして長いものではなく、内容も、貴樹が恐れていたほど辛辣なものではなかった。

貴樹はあからさまに安堵の溜め息をつき、早く用意をしると急にきたマネージャーが不思議そうな顔をするのを、笑って誤魔化した。

「よっし、東城貴樹、いざ出陣！」

「……あんまり最初から飛ばさないでよ。二時間もあるんだからね。途中で燃料切れとかしたら、シャレにならないでしょ」

「わかってますよー」

これから臨むのは、毎週レギュラーで受け持っている、深夜のラジオだ。これから、二時間の生放送。最初から飛ばして行ったら、途中でテンションが落ちてしまうのは目に見えている。これまでの経験でそういう痛い目を見ているから、マネージャーが警戒するのも理解できなくはない。

普段なら、そんなマネージャーのお小言に少しばかり苛立ちを覚えるところだが、今日は気分がいい。これなら、最初から最後まで高いテンションを保っていられそうな気がする。

貴樹は所定の位置に座ると、いつも以上に調子よく喋りだした。

「皆さん、こんばんはー！ REAL MODEの東城貴樹です！今夜も都内某所のスタジオから、完全生放送でお送りします。これから二時間、俺のお喋りにお付き合ってください。まずは一曲目、REAL MODEで、？テクニカル・ジョーカー？をお聴き下さい」

今現在、世間では大人気のはずのプロデューサー・ユニット、REAL MODE。そのメイン・ヴォーカルであり、プロデューサーである天宮順平あまみやじゅんぺいを核とした製作集団が世に送り出す楽曲を歌うための、唯一のメンバー。それが、東城貴樹だ。

時間に追われるばかりの殺人的スケジュールを笑顔でこなし、ど

んなに突っ込んだインタビュも得意な軽妙なトークではぐらかす、最近のヒットチャートの常連。成人男性としてはやや小柄な部類に入るが、整ったルックスと生まれ持った天性の声の魅力は人々を惹きつける。バラードで甘く囁くような甘い歌声を披露したかと思えば、次のロックナンバーでは叩きつけるような力強いシャウトを聴かせる、魅力溢れるヴォーカリスト。

しかし。

彼の実態は、たとえば、あまり大きな声で吹聴できるような代物ではなかった。彼を楽曲やインタビュでしか知らないファンが聞いたとしたら、滂沱の涙を流してイメージを狂わされたと嘆くに違いない。

彼は、ただのオタクだった。アニメやゲームの美少女をこよなく愛し、二次元の美少女を『俺の嫁』と宣言し、たまのオフには溜め込んだアニメの録画を見るか、アキバに行つてエロゲやフィギュアを買いあさるような人種である。どこからどう見ても、真性のオタクにしか見えない趣味だ。

今の絶賛のお気に入りには、スイートキューティというアニメだ。いわゆる魔法少女ものの範疇だが、深夜帯に放送していたアニメだから、厳密には子供向けではない。魔法少女という響きで侮つて見ていると、痛い目を見る深い話だ、と、貴樹は思っている。その中でも、貴樹はヒロインの親友ポジションにいる『あすか』がお気に入りだった。今現在の『俺の嫁』だ。

もちろん、そんなことを表立って喋つては、せつかく作り上げたイメージが崩れる。マニアの常とでも言うべきか、元来はお喋りな貴樹ではあったが、言いたいことの半分も言えないのでは身体に悪い。にっこり笑つて用意された台本を読むことを了承してはいても、もやもやとしたものは確実に増えて行く。

ああ、これがストレスつてヤツなのかな、と、思ってしまうのは仕方があるまい。

（大体さあ、俺を流行に乗せようつてのが無茶な要求なんだつての。

自慢じゃないが、俺の家のテレビはゲーム画面とアニメしか映さ  
のだぞ。イメージが崩れるから喋るなって言われても、俺がオタク  
なのは変えようのない事実だったのを認めるよな……。アニメとエ  
ロゲが好きで悪いのか。人に迷惑かけてるのか？ そもそも、そん  
なのがばれて離れて行くようなファンなんて、俺のことなんかそん  
なに好きじゃないのさ)

流れる自分の曲を聴きながらいじいとそんなことを考えている  
自分の後ろ向きな思考も、実は嫌だ。だから、マネージャーのいう  
ことにも一理あると思って、おとなしく従っている。完全に彼女の  
言葉を否定できないからこそ、納得できない部分があっても従う  
べきだと判断しているのだ。

歌うことは、好きだ。

歌は自分の天職だと、思っていることも本当だ。

だから、ここで失敗して終わりたくない。自分の趣味を知られる  
ことは痛くも痒くもないが、それが原因となって歌えなくなるとい  
う未来があると考えるのは、ぞつとする。

それだけは、絶対に嫌だった。

とは言え、発言を制限される生活はかなりのストレスをもたらす  
ことに、違いはなかった。趣味のことになると普段の何倍も饒舌に  
なってしまう貴樹としては、かなり辛い。ふとした拍子に、うつか  
り爆発してしまいそうになることもある。

正直になれる場所が欲しい、と思うことがある。自分をただの『  
東城貴樹』とだけ見て、話をしてくれる、そんな友だちが欲しかっ  
た。素の自分に帰ることができるのが、隠れアカウントでつぶやく  
ツイッターだけだというのは悲しすぎる。

そりゃ、地元に戻ればそういう友だちはいる。こんなに有名にな  
る前にできた友だちだって、少ないながらも存在する。それでも、  
彼らは『REAL MODEの東城貴樹』を知っているわけで、当  
たり前のことでも少し寂しい。

(あれだけテレビに出ているのに、俺のことを知らない人もいるん

だな……)

貴樹自身、自分はそれなりにトップに近い場所にいると  
思っていた。

それは自惚れでも何でもなく、事実として存在しているもの  
だからだ。テレビに出ていない日なんて数えたこともないし、  
そうではない自分なんて、今は考えられなかった。

なのに、彼女は自分を知らないと言った。あの言葉に、嘘があ  
ったとは思えない。おまけに、頭に豆腐が詰まっているとまで言  
つてのけたのだ。

腹が立つよりも何よりも、純粹に疑問に思った。

あれほどまでにテレビに出ているのに、自分を知らない人間が  
いることへの、純粹な疑問だ。けれど、それはすぐに興味に変わ  
り、その気持ちは、今や何とも表現し難いものになりつつある。

最初は、彼女が自分を知らないということに、本当に驚いたのだ。  
迂闊に一人で出歩くと、即座にとんでもないことになるのは経験  
済みだ。さすがにそんな場所にいるとは思われないのか、アキバで  
うろついている時に見つけられたことはないが、普通に歩いてい  
て見つかることはよくある。一応、変装らしきものをすることはす  
るのだが、ファンにかかればそんなものはあってもなくても同じこ  
とらしい。この前、彩と初めて会った時にしても、一人でぶらぶら  
していたらファンに見つかって追い回されて、どうにか逃げるため  
に飛び込んだのがあの喫茶店だった。

イメージされている東城貴樹であれば、絶対に立ち寄りそうな  
場所。咄嗟に考えたにしては、成功だったと思う。当然、あの後、  
きちんとお店に連絡をして、迷惑をかけたことを告げ、謝罪はした。  
迷惑をかけたのは事実だから、謝るべきところは間違えてはなら  
ないからだ。

彼女は……彩は、おそらく、あの店の常連なのだろう。あそこで  
過ごす時間を邪魔されて怒っていたようだから、そうに違いないと  
思う。

あまりテレビを見ない人なのかもしれない、とも考えたが、それにしても、まるで認識されていなかったのが嬉しいのか悔しいのかよくわからない。

貴樹が出演しているのは、何も音楽番組に限ったことではない。バラエティだとか、トーク番組だとか、もらえる仕事にはできる限り応えたいとは思っている。何より、CMだってそこそこ出ているはずなのに、それすら認識されていないというのも何とも言えない。彩は、よほどテレビを見ない種類の人間なのだろう。

だが、考えてみれば、そういった相手は貴樹にとって貴重な存在だった。いろいろと聞かれずに済むし、イメージと違うことを口走ったとしてもがっかりされたりはしない。うっかり『俺の嫁』の話をして、苦笑されるだけでドン引きされることはないかもしれない。

世間に与えているイメージには気を使い、と口をすっぱくして言われているのだ。鬼のようなマネージャーからは。

この放送が終わったら、ちゃんとメールに返事を書こう。と、貴樹はいつになくうきうきしながら思った。

彼女は、食事は何が好みだろう。

生放送中だというのに、貴樹の頭の中はお花畑だった。

まずは、友だちになることから始めよう。そして、彼女が自分の趣味に寛容であれと思う。スイートキューティのグッズを持っていくくらいだから、吐き気がするほどオタクを嫌悪しているとか、そういうことはないと思いたい。

その先にどうなるかはわからないまでも、貴樹は、そう決意したのだった。

(……メール？ こんな朝っぱらから、誰？)

彩が朝起きてから携帯を覗くと、メールが来ていた。

送信時刻を何気なく見てみれば、午前四時半。普通の生活をしているのなら、夢の中だ。どういう生活サイクルの持ち主が、こんな少々常識はずれな時間帯にメールを送ってくるのだ、と思えば、差出人の欄は東城貴樹になっていた。

彩でなくとも、首を傾げたくなるのは常識の範疇で生活している者としては、当然のものだと思いたい。昨夜は多少なりとも感じていた罪悪感が、微妙に吹っ飛んでしまいそうだ。

少しすつきりしない頭でメールを開いて見てみると、最初に来たメールとほぼ同じ内容だった。要するに、食事に誘っているものだ。彩が都合のつく日程を書いたものだから、早速日時と場所を指定する旨が記されていた。

「……どうしろと」

指定されている日時は、明日の夜。予約はして話は通しておきますのでご心配なく、なんて、紳士めいた言葉まで添えられている。ここまでされているのに、今更無視すると言うのも気が引ける。

彩が思っている以上に、向こうがこの前のことを気にしているらしいことが伝わってくるからだ。

だが、問題は、向こうが指定してきた場所だ。

意外すぎて戸惑う、とでも言えばいいのかもしれない。急にこんな場所に呼び出されても、困る。第一、彩はこんな場所には縁がない。

指定されたのは、いわゆる一流ホテルのレストラン、だ。

名前は聞いたことがあるが、ここには行ったことはない。行くこうと思っただけでもない。職場の研修で一応のマナーは叩き込まれているから、こうした場所に呼ばれて不自由を感じることはないが、問題はそこではない。

こんな場所に呼び出して何がしたいのか、彩にはさっぱり理解できない。第一、このレストランの値段は卒倒しそうなものがついていたような気がするのだが、どうしろと。

「……これは、もちろんあいつの奢りなんだよね……？」  
でなければその場で帰る、とつぶやきながらも、彩は簡単にメールを打って送信した。

返事は、たった一言だけ。「わかりました」だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9438y/>

---

Over Line ~ 君と出会うために

2011年11月29日02時02分発行